

かまくら 女性史の会 Newsletter

第128号

2025年6月21日発行

〒248-0012 鎌倉市御成町18-10
NPOセンター鎌倉 気付
メールボックス26
E-mail: syokmat@yahoo.co.jp

《思い出—かまくら女性史の会》

鎌倉市図書館3階の近代史資料室の書棚に古いファイルがある。「鎌倉女性史1・2」「なでしこの会」「地域婦人団体連合会」などである。久しぶりに開いてみると、聞き書きをした人のテープ起し原稿などが懐かしい。

私が鎌倉に住むようになった1970年頃から、市内で行われる行事に参加しているうちに、知り合いになった方々が多い。その中に、いつも和服姿で目立つ女性がおられた。お年を召した小柄な方で、会場内の通路を元気にスタスタ歩いて、顔見知りの人たちに笑顔で話しかけている、いかにも知り合いの多い方だなと感じた。数年後に彼女は湘南YWCAの橋本恭子さんだとわかった。その後また数年たち、その橋本さんから、「私の知り合いを案内するわ。一緒に行きましょう」と誘ってくださった。その聞き書きがまとまったのが『真(まこと)のあしどり 橋本恭子さんを囲んで』(1999年)である。前半には、新聞や文集に書かれた橋本さんの「折にふれて私の主張」—「敗戦の日に思う」・幾多郎先生と琴さん・鎌倉駅地下道物語・開かれた扉—かまくら市長選挙をたたかって・核兵器完全禁止の垂れ幕を掲げた鎌倉市・よき師、よき友に囲まれて三十六年、などを再録させてもらった。後半に、橋本さんが合わせて下さった鎌倉の戦後を元気にした素晴らしい女性たちとの「語らい—あの頃のこと」を掲載した。その一つ一つの出会いの場面が今も目に浮かぶ。

養老静江さんの医院の部屋では、掘り炬燵のような場所で素顔の養老さんのお話を、時間が経つのも忘れて楽しくお聞きした。大胆な生き方は橋本さんとも通じるころがあった。鎌倉山にお住まいの乾範子さんのお宅では、窓越しに夕日を浴びながら、市議員宮本せつ子さんを中心にした「婦人運動」、女性グループを結びつけた「鎌倉婦人団体連絡協議会」、協同組合活動、小児マヒワクチン輸入、鎌倉駅地下道開設、稲村ヶ崎ホテル建設反対運動などを盛り上げたとお聞きした。浄明寺の大藤ゆきさんにもお会いした。彼女が出会った得難い先生は、古在由重と柳田国男であり、その教えの中に「生きていくために何かプラスアルファになることをしなさい」という言葉があったという。印象に残っている。民俗学者大藤ゆきさんは、私が四国の農家の出身で、田植え、稲刈りを手作業でやるとお話しすると、「あら、うらやましい」と言われて、私は少し驚いた。御父上に連れられて柳田国男に紹介されたという恵まれた環境でも、実際に土の中で育った者の実感には届かないと思われるのかと悩ましいものを感じた。小町の梶田三四さんからは、保育所運動と地域の白梅婦人会活動の話があり、さらに婦人団体協議会で意見をたたかわした時の西田琴さんの意見がすごく光っていたと強調された。次に助産師の丸エキさんのお話も豪快だった。「そこら中私が取り上げた子。ここで生まれた子の面倒を見るうち自然天然に託児所になった」と言う。その他に助川司奈子さん、桐山清井さん、塚田寿子さん、村上敦子さん、高木孝子さんなど、今は懐かしい。皆さん心の底に悲しみとやさしさをかかえている。橋本さんが選挙カーに乗って「政子に続け—」と応援演説をしたというあの日は、遠い昔になってしまった。しかし今は、その流れを受けて力強く上品に歩む「かまくら女性史の会」が立派に本をまとめ、さらに活動を続けている。

2025年6月17日

鎌倉近代史資料室 平田恵美